

専門的に面白さを深めるアマチュアの人生と生涯音楽学習

東京大学大学院情報学環 特任研究員 杉山昂平

1. 遍在するアマチュア音楽家たち

文化人類学者のルース・フィネガンは1980年代前半にイギリスの新興都市ミルトン・キーンズでフィールドワークを行い、この町のアマチュア音楽活動を網羅的に調べた（Finnegan 2007 [1989]）。アマチュアはプロに比べれば「隠れた」存在であるが、丁寧な観察を行うとその豊かな生態系が見えてくる。フィネガンが描いたアマチュア音楽活動は、ジャンルでいえばオーケストラ、吹奏楽、フォーク、ミュージカル、ジャズ、カントリー、ロック、ポップスといった多岐に及び、活動場所も家庭、学校、教会、クラブやパブ、文化センターなど様々だった。

同じように日本においてもアマチュア音楽活動は盛んに行われているが、本稿では遍在するアマチュア音楽家たちにとって「アマチュアであり続ける意味とは何か」という問題について考えてみたい。たとえプロではなくとも、生涯にわたって音楽活動に参加し続けることにはどんな意味があるのだろうか。

2. 専門的に楽しむ存在としてのアマチュア

手がかりとなるのは余暇研究における「シリアスレジャー」(serious leisure)という概念である。シリアスレジャーはすでに杉山(2019)や歌川(2020)によって紹介されているが、いまいちど提唱者ロバート・ステビンスの定義を引くと、シリアスレジャーとは「アマチュア、趣味人、ボランティアの中核的な活動を組織立てて追求することであり、彼・彼女らにとって大変価値があり、面白く、充足をもたらすものであるため、典型的な場合として、専門的な技能、知識、経験を組み合わせ習得し、発揮するレジャーキャリアを歩み始めるもの」(Stebbins 2015: 5)である。ステビンスは音楽からスポーツまで様々な分野のアマチュアを調査することで、その活動が単なる遊びや気晴らしではなく「真剣な」(serious)ものであることに注目し、この定義をつくりあげた。

シリアスレジャーという概念から分かるのは、アマチュア音楽活動は「音楽活動を継続し、経験を蓄積することで得られる専門性を用いて音楽を楽しむこと」だという点である。例えば、気晴らしとしてのカラオケは誰にでもできるし、何度歌おうと経験の蓄積は少なく、同じ歌を同じように楽しみ続ける。これはシリアスレジャーというよりもカジュアルな音楽体験である。

しかし、いざ目標を定めて一人カラオケで練習に励んだり、ボイストレーニングを受講したりするようになると、カラオケはシリアスレジャーとなる。おそらく、そうしたカラオケは「誰でもすぐに同じように歌える」というものではなくっていきだろう。そこでの歌う楽しみは、継続的な努力によって初めて可能になるものである。

アマチュアはいかんせんプロと比較されやすく、「非専門家」とラベリングされがちである。特にクラ

シック音楽の場合は音楽大学や音楽院による専門教育が確立されているため、そうした学歴を持たない人々は音楽の専門性を持っていないかのように見えてしまう。だが、実際のところ、一般公衆と比べればアマチュア音楽家は音楽の専門性を多分に身につけているのである。音楽経験の乏しい人にとっては「楽譜が読めること」ですら「すごい」ことであるのはその証左と言えよう。

3. 面白さを深めるアマチュア音楽家人生

このようにアマチュア音楽活動をシリアスレジャーと捉えると、アマチュアはアマチュアであり続けることによって、自分にとっての音楽の面白さを深めていくものと考えられる。愛好家がわざわざ余暇時間を捻出し費用を持ちだしてまで音楽活動をするのは、自分にとって楽しいから・面白いからに他ならない。ある意味でそれは自己満足に浸ることである。

一方で、自己満足の内容は、活動を継続し音楽という専門領域の奥深さに出会うなかで更新されていく。音楽を始めたばかりの頃と同じ面白さしか味わっていないアマチュアはそうそういないだろう。アマチュア音楽活動は「発展性のある自己満足」の活動なのである。逆に、そうした面白さを深められなければ、好きだったはずの音楽活動に飽きて中断してしまうこともあるかもしれない。

4. アマチュアオーケストラ団員の場合

こうした「専門的に面白さを深めるアマチュア音楽家人生」の実態を捉えるために、筆者は以前、アマチュアオーケストラ団員の方々に協力を得てライフヒストリーの聞き取り調査を行った(杉山ほか 2018)。これは余暇研究と学習科学の学際的な研究であり、アマチュアオーケストラ活動をシリアスレジャーと捉えたうえで、オーケストラ活動における「面白さ」の深まりを、学習科学のいう「興味」(Järvelä and Renninger 2014)という概念を用いて明らかにしたものである。研究の詳細については杉山ほか(2018)を参照されたいが、ここでは一つの事例を紹介しよう。

オーケストラ団員の語りのなかで典型的に見られたものが、かつては「上達すること」に興味をもち、またそれに囚われていたというものである。例えば、トランペット奏者であるインタビューーAは、高校で吹奏楽部に所属した後、大学で学生オーケストラ、卒業後は複数大学のOB・OGが参加する市民オーケストラで活動している。彼女は学生オーケストラ時代の活動を次のように回想していた。

大学オケ時代は音楽を演奏するにあたって「こうあるべき」みたいな、「もっとこうしなきゃ」とか「ああしなきゃ」みたいな、すごく狭い世界で演奏してたなって、いま思うと振り返っているんです。すごく枠が決まったなかで一生懸命上達しようとしていたみたいな。「先輩がこうだからこうしなきゃ」とか。自由じゃなく、いっぱいいっぱいになっていたなっていうのが今思うと。ただ別に楽しくなかったんじゃないかって、楽しくやっていたはずなんですけど、途中でやっぱり音楽を楽しむってことを忘れて、毎日のルーティーンのなかで、「これはやりきらなきゃいけないこと」みたいな。

そのようにして上達に囚われていたインタビューーAは、「卒業したらオケはやらないなって思ってた

んですよ。完全に。もう結構疲れ切ってもいい。その時点で4年間やって、もうこれいいなと思って、もうやらないなと思っていた」というが、しかし実際にはその後もオーケストラ活動を続けている。

そのきっかけとなったのは、大学4年生の時に、現在所属している市民オーケストラにエキストラとして参加したことだったという。社会人で構成される市民オーケストラの活動はインタビューーAに鮮烈な印象を残した。

練習の時に、金管などで最後列にいて、前列が木管じゃないですか。当時その木管陣がかなり優秀な人たちが揃ってて。学生オケと違う空気で社会人オケだから。なんていうか、一回一回の練習にすごい集中してるなってというのが分かって。さらに、すごい楽しそうだったんですよね。生き生きしてて。学生オケって週3日オケがあって、それ以外の日もみんな個人練とかセクション練とかしてて、4、5ヶ月ぐらいかけて1曲をしあげるみたいな。結構長期戦じゃないですか。毎日毎日練習があって、みたいな。その中で社会人オケって土日のどっちかしか使えなくて、しかもかなり短期間で仕上げていくから、1回1回みんなすごく楽しむし、すごく集中してるし、空気が全然違ったんですよ。「音楽づくりをしてる！」みたいな、生き生き感があって。それに楽譜上休んでる時に、「はっ」急に感銘を受けて。「社会人ってすごい」みたいな。仕事で毎日平日すさまじく忙しいのに、その土日にこの活力をもってみんな参加してるってすごいなって思って。やっぱりオーケストラってすごいなって。だから音楽ってというよりはオーケストラってすごいなってというのが。個人で家で吹いてるんじゃないで、みんなで集まってオーケストラで演奏するっていうことのすごさっていうか、その力ってすごいなって思って。「あっ卒業しても続けたいな」ってその時初めて思って。

このように市民オーケストラに移籍し、学生オーケストラと市民オーケストラの差異を比較することで、インタビューーAは「一生懸命上達すること」から「みんなで集まって演奏すること」へと興味を深めていた。もちろんそれまでもオーケストラに参加し、日々合奏を行ってきたはずだが、こうした経験を通して他者と共に音楽することの面白さを改めて認識したのである。

インタビューーAのように楽団を移籍することで新たな興味を深めた事例は他にも存在した。またそれ以外にも、既存の所属楽団のなかで熱心な仲間に出会ったり、セクションリーダーなどの役職についたりしたことや、既存の楽団に所属しつつも外部で個人教師についたことがきっかけとなっていた場合もあった。こうした経験を通して、アマチュアオーケストラ団員は自分にとっての音楽の面白さを生涯にわたって深めていくのである。

5. アマチュア音楽活動に織り込まれた生涯音楽学習

筆者は本稿の冒頭において、アマチュア音楽家たちにとって「アマチュアであり続ける意味とは何か」「たとえプロではなくとも、生涯にわたって音楽活動に参加し続けることにはどんな意味があるのだろうか」という問題を提示した。シリアスレジャーの観点に立てば、その答えは「音楽という専門領域の深みへ潜り、音楽の新しい面白さに出会い続けられること」ではないかと考えられる。アマチュア音楽家は一般公衆と異なり、あえて音楽の専門領域に参加しそれを人生の一部として楽しんでいる。その意味ではプロと同じ存在と言えよう。「プロとアマチュアの境界線」よりも「アマチュアと一般公衆の境界線」の方

が厳然と存在しているかもしれない。

こうしたアマチュア音楽家たちは文化行政や生涯教育の理念を実現するために活動しているのではない。ましてや「生涯音楽学習をやっている」と思ってもいまいだらう(萩原 2016: 83)。生涯音楽学習に関する議論では、理念に基づく「主体性を獲得せねばならない」「単なる暇つぶしやストレス解消に終わってはならない」といった規範的主張がなされることがある(丸林 1999: 30, 44)。もちろん「結果として」理念に適う音楽活動が行われたり、アマチュアが理念に「協力」したりすることはあるかもしれないが、だからといって理念にそぐわないアマチュア音楽活動が「指導」されねばならぬ道理はない(杉江 2009: 254-255 も参照のこと)。

しかし、文化行政や生涯教育の理念に従わないからといって、アマチュア音楽活動に発展性がないわけではない。本稿で見てきたように、アマチュア音楽家にとって音楽を学ぶ意味は、あくまで自分が音楽活動を楽しめるようになること、音楽の面白さを深めていくところにある。生涯音楽学習はアマチュア音楽家の人生の中で意味をもつのである。

もちろん、教室や講座に参加し指導を受けることで学ぶ場合もある。実際、筆者の研究でもオーケストラ外の個人指導をきっかけに興味を深めた事例もあった。その一方で、所属するコミュニティの変化をきっかけに興味を深めることもまた生涯音楽学習である。この場合、学びを可能にするのはアマチュアたちの楽団を越えた移動を可能にするつながりである。誰かの教育的意図が介在することなく、アマチュアたちのつくる社会的世界そのものが学びを促すと言える。

アマチュア音楽家の人生や社会は、文化行政や生涯教育の理念、音楽教師による指導のあずかり知らぬところで広大に展開している。それらを支え盛り立てることも、ひとつの生涯音楽学習支援のあり方である。

引用・参考文献

- Finnegan, R. (2007 [1989]). *The hidden musicians: Music-making in an English town*. Wesleyan University Press. : 湯川新 (訳), (2011). 隠れた音楽家たち イングランドの町の音楽作り. 法政大学出版局.
- 萩原史織. (2016). 生涯学習としてのアマチュア音楽活動における学び 《第九》を歌うアマチュア合唱団の活動を例に. 音楽教育実践ジャーナル, 14, 83-88.
- Järvelä, S., and Renninger, K. (2014). Designing for Learning: Interest, Motivation, and Engagement. In K. Sawyer (Ed.), *Cambridge Handbook of the Learning Sciences* 2nd Edition (pp. 668-685). Cambridge University Press. : 小野田亮介 (訳), (2017). 学びのためのデザイン 興味, 動機づけ, 積極的関与. 秋田喜代美・森敏明・大島純・白水始. (監訳), 学習科学ハンドブック 第二版 第3巻 (pp. 123-137). 北大路書房.
- 丸林実千代. (1999). 生涯音楽学習入門. 音楽之友社.
- Stebbins, R. A. (2015). *Serious Leisure: A Perspective for Our Time*. Transaction Publishers.
- 杉江淑子. (2009). 10年間の研究動向 生涯学習社会における音楽教育研究. 日本音楽教育学会 (編), 音楽教育学の未来 (pp. 252-265). 音楽之友社.
- 杉山昂平. (2019). レジャースタディーズにおけるシリアスレジャー研究の動向 日本での導入に向けて. 余暇ツーリズム学会誌, 6, 73-82.
- 杉山昂平・森玲奈・山内祐平. (2018). 成人の趣味における興味の深まりと学習環境の関係 アマチュア・オーケストラ団員への回顧的インタビュー調査から. 日本教育工学会論文誌, 42(1), 31-41.
- 歌川光一. (2020). シリアスレジャー時代の生涯音楽学習. 音楽文化の創造 (CMC) 電子版, 11, 1-5.